

コンモドウス帝

松浦 純子

ローマ帝国にコモドウスあるいはコンモドウスと言われる皇帝がいた。この人物の名前を初めて聞いた時、インドネシアのコモド島に住む「コモドドラゴン」を思い浮かべた。生きた恐竜とも言われ、体長三メートル、体重一四〇キロにもなる。このオオトカゲのイメージから皇帝の姿を想像していたが、彫像を見ると全く違っていた。

彼は、五賢帝最後の皇帝で哲学者のマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝の実子である。この皇帝以前の四人の賢帝は実子を残さなかったので、養子を迎え入れて後継者にした。従って、有能な人物を次の皇帝に据えられた。しかし、マルクス・アウレリウス帝の場合は運悪くこの実子がいた。しかもどう考えても国を治めるには相応しいとは言えない人物だ。

コンモドウス帝は父が生きていた時代には父と共同統治をして、帝位継承者としての教育を受けた。この時点では取り立てて言うほどの非はなかったようだ。しかし、父がウィーンで亡くなって一八歳で即位すると政治には関心がなくなり、即位二年目には早くも自分の姉が企てた暗殺未遂事件に遭遇する。ここから疑心暗鬼に陥り、気に入らなければ側近たちを次々と処刑した。さらに娯楽や趣味に走り、自らをヘラクレス神の化身と考えるようになり、ライオンの毛皮を頭からかぶって手には棍棒を持ち、ヘラクレス風のいでたちをするようになって、その姿の彫像を作らせた。また、皇帝であるにもかかわらず、奴隷身分の職業である剣闘士として獣や人間相手に戦うことを好んだ。皇帝のこの野蛮な行動を悲しんだ民衆もいた。ついに、重臣はこの皇帝を排除するしかないと考え毒殺を試みた。しかし悪運強く死なず、その後絞殺でやっと亡くなった。

彼と同時代の歴史家は彼の治世を「帝国にとって災難」といい、十八世紀のイギリスの歴史家エドワード・ギボン「ローマ帝国の衰亡はコンモドウス帝から始まった」としている。コンモドウス帝にはライオンの毛皮ではなく、オオトカゲの皮を着せた方が似合っていたのかもしれない。